

## あ と が き

阿波学会紀要は本号で第59号を数え、通常論文18編と特別寄稿5編を掲載することができた。阿波学会の学術調査は、県内の市町村をすべて踏破し、一周の時を迎えたことになる。これまでに執筆・編纂<sup>へんさん</sup>に携わった各位と事務局の支援に感謝したい。

次年度にあたる平成25年度以降の総合学術調査からは、ひとつの対象地域を2年間かけて実施することになる。本年度の理事会・評議員会では、会則の審議を踏まえて、本会の目的にある「本県に関する学術調査および研究を行い、文化の推進および地域貢献に寄与する」を前にし、「本会は、徳島県に関する学術調査および研究を行い、文化の推進および地域貢献に寄与するとともに、あわせて本県内各学会相互の連絡調整を図ることを目的とする」に改訂することとした。これにより、総合学術調査の重要性が増すことになる。さらに紀要に関しては、「これまでの質を維持し、向上させるとともに、読者の拡大にも努める」と意気込みを見せている。

調査様式の変更に伴い、本紀要の発刊は隔年毎となる。一方、調査成果の増加に伴う報告内容の増加も予想されるが、当面、本誌紙媒体での分量は、財政等を考慮し、ほぼこれまでと同等量を想定している。必然的にCD版のデータベースとしての役割が増大することが予想される。先般あとかぎで、「阿波学会紀要のあり方に関して、膨大なデータ（資料・標本のリスト、カラー画像情報や動画・音声等）は、資料として電子ファイルに収め、巻末に添付し、本文では、読者に、調査の目的や手法、ならびに成果とその意義がわかるように記述するといった方法など、皆様の意見を踏まえて検討を詰めていきたい。県内学術情報のデータベースとして、事実記載を尊重しながらも、紀要が単なる定式化した報告書に留まることは避けたいと、常に編集委員会は考えている。執筆者各位も同様であろう。相互研鑽<sup>けんさん</sup>を重ねることで、精度を維持しながら、より広く、多くの読者に向けて、記述する内容と方法を改善してゆきたい」とお伝えしたことの成果が期待されるところであろう。

新たな出発に際して、2年計画の1年目である次年度は、阿波学会発足60周年の前年にもあたることから、編集委員会は、その余力で「記念誌」編纂の組織母体として機能することが期待されるところであろう。記念出版事業としては、全ての登録学会・調査班の参画のもとに、県下60年間の阿波学会と会員の取り組み成果や今後の展望を含めて、班員が推奨する県内の諸事象をガイドブックとして内外に発信し、調査班の活動を紹介することが予定されている。県内一周の現時点で、学会及び班員相互が取り組みを振り返り、成果と展望をガイドブックとして集成することは、より多くの読者に本会の活動と取り組みの歴史を伝える効果が期待される。同時に、今後の活動の方向性と開拓領域を見極めることにもつながり、ひいては県誌編纂等の機運を高め、その基礎に資することも期待したいところである。地域から世界へと発信する文化・学術の発展のために、記念出版作業の成就を祈念したい。

既にご存じのように、紀要報告書で公開されている成果の裏付けとなる基礎データの収集は、単に当該年度の総合学術調査期間に留まらず、背景には、参加学会や班員の不断の課題探求がある。阿波学会の地域貢献は、学術団体の調査成果と事務局を担う図書館との協働の上に成り立っていることを読者の皆様にはこの場を借りてご披露したい。引き続き、関係機関・団体ならびに会員諸氏の連携と協力をお願いする次第です。

最後になりましたが、紀要59号発行に支援いただいた関係各位には、紙面をお借りして厚く御礼申し上げますと共に、益々のご発展をお祈りします。  
(石田 啓祐)

### 阿波学会紀要編集委員会

委員長 石田 啓祐

副委員長 川添 和義 中野 真弘

委員 岡山真知子 小川 誠 喜多 順三 近藤 孝造 仙波 光明 高橋 晋一  
根津 寿夫 羽山 久男 堀江 秀茂 萬宮千鶴子 山本 裕史 和田 賢次